

CT や MRI で正しい診断をするためには造影剤を用いた検査が必要なことがあります。当院では患者様の自由意志による同意を得たうえで造影検査を行いたいと考えています。担当医の説明をお聞きいただき、疑問点は質問され納得されたうえで、造影検査の実施に同意される時は別紙”説明・同意書“にご署名下さい。
なお、実施までに同意を撤回されてもかまいませんので、お申し出下さい。



1 造影剤を使う意義

造影剤を使用することにより、新たな病変が見つかることや、病変の性質についてのより詳しい情報を得ることがあり、治療方針を立てる上で有用です。一部の疾患では、造影剤を使用しないと正しい診断ができません。

2 造影剤の使用方法

通常、造影剤は静脈を確保(留置針を刺入)して自動注入器にて静脈内に注入します。

1. 多くの場合、造影剤を注入する際に熱感を伴いますが、一時的であり心配はいりません。
2. 勢いよく造影剤を注入するために血管外に造影剤が漏れることがあります。この場合、漏れた部位に腫れや痛みを伴うことがあります。基本的に時間が経てば吸収されますので心配ありません。漏れた量が多い場合には、処置が必要なこともあります。
3. 造影剤に限らず、注射により神経が損傷され痛みが続く場合があります。

3 造影剤の副作用が生じる危険が高い状態(場合によっては検査ができません)

1. 以前に造影剤で具合が悪くなったことがある。
2. 気管支喘息やアレルギー体質と診断されている。
3. 腎臓の機能が低下している、あるいは腎臓病と診断されている。

【CT の場合のみ】

4. 糖尿病の飲み薬(塩酸メトホルミン:メトグルコ、グリコラン、メドットなど)を服用している。
5. 重篤な甲状腺機能亢進症の方。

4 造影剤の副作用について

造影剤は多くの場合、人体に無害です。しかしごくまれに副作用の見られることがあります。その大まかな頻度は次のとおりです。

1. CT 造影剤の副作用出現の頻度
軽症: 100 人に 1 人(治療不要なかゆみや腹部の不快感、嘔吐、熱感、息切れなど)
重症: 2.5 万人に 1 人(治療の必要な不整脈、アナフィラキシーショック、痙攣、腎不全、意識消失など)
死亡: 非常にまれ(40 万人に 1 人程度)
※検査から 1 時間～数日後に発疹・かゆみ・はきけ・めまいなどが見られる場合があります。
2. MRI 造影剤の副作用出現の頻度
軽症: 100 人に 1 人以下(不定愁訴、頭痛、嘔吐、潮紅、咽頭浮腫、血管浮腫)
重症: 1.9 万人に 1 人以下(呼吸困難、肺水腫、アナフィラキシーショック、視覚障害、痙攣など)
死亡: 極めてまれ(83 万人に 1 人程度)

5 検査前の食事制限(絶食)について(CT の場合のみ)

検査で造影剤を使う可能性のある場合、検査前の一食を取らないで下さい。(午前中の検査では朝食を、午後の検査では昼食を取らないで下さい。)

ただし、脱水状態では、副作用が発生し易くなりますので水分(水やお茶類)は十分にお取りになって結構です。

※ 万が一、副作用が起こった場合には迅速かつ最善の処置を行いますので、安心して検査を受けて下さい。